

コリント人への手紙第二12章4節 「天の幻」

1A パラダイス

1B 第三の天(主の御座)

2B 主の園

1C 主の住まい

2C いのちの木

2A 天に着いている力

1B キリストにある者

2B 取るに足りない苦しみ

1C 支える力

2C 第一にする力

3C 肉の行いを殺す力

本文

コリント人への第二の手紙 12 章を開いてください。私たちは午後に、12 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は 4 節に注目します。「彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」パウロが、一時的に天に引き上げられたという体験です。今、偽使徒たちが、いかに自分たちが靈的に優れているか、自己推薦を教会の人々に対して行っていて、一部のコリントの人々がそれに巻き込まれているので、パウロは、強いられて自分の靈的な資格を弁明せざるを得なくなりました。その中で、これまで誰にも言っていなかった、実に 14 年間話していなかったこの体験を、かなりためらいながら話しています。

パウロが主から受けた幻と啓示は、彼らには全くないものであり、パウロと彼らを比べたり、比較したりすることもくだらなく感じるものです。ちょうどそれは、ミリアムとアロンがモーセのことで、異邦人の女を妻としていることを非難したのですが、その時と似ています。モーセが神に選ばれ、神から啓示を受けてイスラエルの民を指導していたのですが、モーセの弱みになるようなことをことさらに取り上げて、そして自分にも神の啓示を受けていることを主張しました。「民 12:6-8 主は言われた。「聞け、わたしのことばを。もし、あなたがたの間に預言者がいるなら、【主】であるわたしは、幻の中でその人にわたし自身を知らせ、夢の中でその人と語る。7 だがわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者。8 彼とは、わたしは口と口で語り、明らかに語って、謎では話さない。彼は【主】の姿を仰ぎ見ている。なぜあなたがたは、わたしのしもべ、モーセを恐れず、非難するのか。」夢の中で語られているというのと、口と口で語っているという、圧倒的な差がありました。しかし、モーセは、「地の上のだれにもまさって柔和であった。」とあります(12:3)。こういった、極めて靈的な体験を彼は誇ることはありませんでした。ただただ、主

を愛し、この方に仕え、民を教え養い、導くことに労したのです。しかし、妬みなど、悪意に駆り立てられる者が、一見、肉の弱さのように見えることをことさらに取り上げて、攻撃します。

同じようにパウロと、偽使徒たちの違いは歴然としていました。パウロは主ご自身の啓示によって語られていて、偽使徒たちは、誰からかのお墨付きと自称しているものによって語っているのです。ガラテヤ書 1 章で、「私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。(1:12)」と言っていますが、これはまた、ガラテヤ書の学びの時にじっくりと見ていきましょう。

今朝は、このようにパウロの宣教が、実はイエス・キリストの啓示をはっきり受けているということ。また、天の啓示をはっきりと見たということに支えられていたことに注目したいと思います。彼がなぜ、そこまで福音の真理からぶれることなく、生きることができ、また語ることができたのか？数多くの方が、福音だけでは足りないのだ、これこれのことをしないと十分に救われれないのだと、あれほどの苦しみや迫害を受けているのに、それでも耐え忍ぶことができたのか？それは、天の栄光を見たからに他ならないからです。そして、パウロの地上における歩みは、すべて天からの召しに集中していました。「ピリ 3:14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」神は、このように上に召して下さいます。そして賞をくださいます。ここに一点集中して、パウロは走っていました。

多くの方は、自分の信仰者としての出来栄は、自分の頑張りによるものだと考えています。自分がどれだけ祈ったのか、自分がどれだけ辛抱強く信じることができたか。どれだけ、きちんと聖書を読むことができたか？自分自身にある力で、霊的に生きるかどうかの物差しを、どうしても、いつの間にか持ってしまうのではないのでしょうか？しかし、問題はそこではなく、いかに上にあるもの、天にあるものを見えているかどうかにかかっているのです。私たちが、御霊によって新しく生まれた時、それは上から生まれのです。神から生まれるのは、上、天から生まれており、天につながっているところから、キリスト者のすべての歩みが定まっています。地上のもの、自分の肉のものによっては、その神の働きに何一つ付け加えることができないのです。

1A パラダイス

パウロは、まず「彼はパラダイスに引き上げられ」と言っています。パラダイスとは、何なのでしょう？実は、聖書には、ここの箇所他に 2 箇所しか出てきません。イエス様が、横で十字架につけられている罪人に対して、「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われました(ルカ 23:43)。そして、黙示録の七つの教会で、エペソの教会に対してイエス様が、「2:7 勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」と言われました。この二つだけです。

1B 第三の天(主の御座)

けれどもパウロは、本文の手前、12章2節で「この人は十四年前に、第三の天に引き上げられました。」と語っています。第三の天とパラダイスが同じところとして語っています。聖書は、天について、複数で語っています。いろいろな天があることを話しています。創世記1章1節の、「はじめに神が天と地を創造された。」という言葉の「天」は、複数形です。(シャマイムと言いますが、イムが付くと、ヘブル語は複数形です。英語の翻訳の多くが、heavens と複数形で訳しています。)そして、イエス様が十字架に付けられ、よみがえられた後、天に昇られましたが、エペソ4章10節には、「この降られた方ご自身は、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上げられた方でもあります。」とあります。

いろいろな天がありますが、その中で、聖書で明らかなのは、三つあります。一つは、私たちがいつも目にしている天です。空ですね。もう一つは、空中とも呼ばれているものです。「エペ2:2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」とあります。また、教会の携挙も、イエス様が天から空中にまで降りてくださることをパウロは書いていますね。「Iテサ4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」天的な存在が行き来しているのが、空中です。ですから、物理的な空が第一の天であり、この空中と訳されている、天的な存在、墮落した存在が活動しているところが第二の天であるという人たちもいます。

そして第三の天ですが、「神が王として座のあるところ」ということです。主が全てを支配しておられるということは、この方が王であられ、その王座があるということです。その天こそが、パウロが引き上げられた天です。黙示録4章と5章に、神の王座があり、その周りに四つの生き物、24人の長老がそこでひれ伏している姿があり、また子羊が神から巻物を受け取っている場面があります。それが第三の天であると言えます。

この天は不動です。天と地が過ぎ去っても、神とキリストが王座を占めている天は全く影響を受けません。この方がこの王座から、天地のすべてを支配しておられるからです。神を信じる者に対する挑戦は、目に見えるものだけを信じている者たちからのものです。詩篇115篇には、そしりの言葉が聞かれます。「115:2-3 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。3 私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。」苦しみや試練を受けている時に、なぜ、あなたがたは目に見えないものを信じているのか?という挑戦を受けているのです。そこで、反論として、また信仰表明として、「私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。」と発言しています。それから、あなたがたの神々、目に見えるけれども、そっちは我々を見られないんだよね。耳があっても、聞こえないし。口があっても話ができない、と皮肉っているんですね。

牧者チャック・スミスが、若い時に牧会の働きで悩んでいる時に、いつも励ましを受けにくい、老齢の女性がいたそうです。信仰深い方で、ラジオ番組を持っていたそうですが、彼女がいつも語るのには、「神は御座におられる。」ということです。問題があつて、いったいどういうことになっているのか分からずに、困惑し、悩んでいる時に、「それでも、神が御座におられるのです。」と答えるのだそうです。主が御座におられるということで、心に励ましを受けました。

2B 主の園

そして、この「パラダイス」という名ですが、元々はペルシア語から来たものだそうです。王の住む園という意味合いがあります。先ほど読んだ、黙示録に出てくるパラダイスの言葉ですが、もう一度読みます。「2:7 勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」いのちの木が生えている、神のパラダイスということですが、エデンの園のことを思い出すでしょう。けれども、そこには、いのちの木の他に、善悪の知識の木もありました。そして蛇が現れています。エデンの園のようではありますが、それよりも、はるかにすぐれた所です。そうです、新天新地における、天のエルサレムであります。「黙 22:1-2 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、2 都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があつて、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。」

1C 主の住まい

パラダイスには、主ご自身が住んでくださっています。神と子羊の御座がありますが、太陽の光がありません。なぜならば、「神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」とあります(黙示 22:23)。主が共に住んでくださっています。

2C いのちの木

そして、いのちの木があります。永遠のいのちが、絶えず自分たちを生かしている姿です。このようにして、主ご自身がおられ、永遠のいのちを絶えず、自分のものにしていくところがあるところが、パラダイスです。

2A 天に着いている力

そして、冒頭でお話したように、この天につながっているという希望こそが、私たちキリスト者をキリスト者たらしめます。

1B キリストにある者

私たちは罪の中に生きていて、死んでいたのだと、パウロはエペソ 2 章で教えます。けれども、神が、大きな憐れみをもって、その私たちを、キリストと共に生かして下さったと教えます。そして、こう言っています。「エペ 2:6 神はまた、キリスト・イエスにあつて、私たちをともによみがえらせ、と

もに天上に座らせてくださいました。」にわか信じがたいことです。私たちが今、天上に座らせてくださった、つまり、神の右の座におられるキリストと共に、座に着いているというのです！これが、キリストのうちにあることの奥義ですね。神は、キリストの内にいるようにいるようにしてくださいました。ですから、キリストがおられるところに、私たちもいます。この方が神の右に座しておられるのですから、私たちも御座のそばにいるのです。

私たちは今、見ての通り、このように地上にいます。しかし、霊的にはキリストと共に座に着いているようにしてください、そこから祈りによって、キリストの執り成しにある、神の支配の広がりを経験することができるのです。そして主が戻って来られる時に、私たちは、事実、目に見える形で、神の御国を、キリストと共に統べ治めるようになります。

2B 取るに足りない苦しみ

この天の希望に支えられて、私たちは、地上での歩みを確かなものとします。パウロは、天における神の栄光を知っているのです、このように言いました。「ロマ 8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないと私は考えます。」パウロがどれほどの苦難を受けたかは、みなさんと共に辿りました。コリント第二 11 章に、その苦難が列挙されています。これらの苦難が、取るに足りないというほどに、やがて啓示される栄光はすぐれている、ということなのです。それだけ、ものすごいところなのです！

このすばらしさを描くのに、ジョン・バニヤンの天路歷程では、「天の都」を描き、また C.S.ルイスは、ナルニア王国にて、アスランの国として描いています。ねずみの勇士リープチーブが、波の向こうにあるアスランの国に、舟を漕いで入っていく場面があります。¹聖書そのものには、ヘブル人への手紙の著者が、このように励ましています。「12:22-24 しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、23 天に登録されている長子たちの教会、すべての人のさばき主である神、完全な者とされた義人たちの霊、24 さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る、注ぎかけられたイエスの血です。」

1C 支える力

この天の望みがあるので、私たちは試練や苦しみを支えてくれます。「ロマ 8:24-25 私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。25 私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」どのような試練が来ようとも、殉教の時が来ようとも、それは逆に、天に入る、究極の喜びの日が近づいたことを意味します。

¹ <https://youtu.be/9HPo-G1iejI>

初代教会から今に至るまで、なぜ、死に至るまで聖徒たちは耐え忍ぶことができたのか？それが、パラダイスに入る望みです。例えば、キリシタンの殉教の記録はすさまじいものです。しかし、その中には、一種、異様な光景がありました。それは、その殉教する時を待ちに待っているかのよう
に用意している人々がいたからです。

例えば、山形米沢にある、北山原というところでは、禁教の手がついに米沢まで押し寄せた時、一月ですが雪に覆われ、凍るほどの寒さの中、これから婚宴に向かうかのように晴れ着の姿で、43 名の人たちが歩いていました。彼らは家財すべてを、その衣服一着を残して貧しい人たちの施しとして贈っていたそうです。なぜか？「天国で主と会う日なのだから」ということです。ある一家は、先に両親が斬首されて、処刑場は鮮血が雪の上に広がっていました。そこに娘の幼い少女がやって来て、そこは聖なる所だからというので、わざわざ靴を抜いて、敬意を払い、刀が振り落とされる直前まで、満面の笑みを浮かべていたそうです。そうした素朴なキリシタンの信仰には、「パラソ」という言葉がありました。そう、パラダイスのことです。幼い子たちに、そんな、寒さや痛みをこらえる力なぞありません。ですから、天の望みなのです。そこに、今の苦しみを耐え抜く、神からの力が与えられます。

2C 第一にする力

そして天の望みは、この地上において何を第一にしていくべきなのか、その優先順位を確かにする力が与えられます。イエス様が、神の国と神の義を第一に求めなさい、そうすれば、これらのものは加えて与えられる、という言葉が語られましたね。神の国と神の義を第一にしていくことには、この地上においては犠牲が伴います。ですから、犠牲なしで生きていこうとする惑わしが、いつも私たちに、付きまといます。種蒔きの喩えで、イエス様は、いばらに蒔かれた種が、実を結ばせることができないことを警告されました。

主は、そうした世における戦いにおいても、必要を満たして下さることを約束されています。「マタ 19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」イエス様の名のために、家族さえも捨てなければいけなくなった状況にある人たちがいます。また、畑を捨てなければいけなくなった者もいます。けれども、それでもその喪失を埋め合わせて、あふれるまでにイエス様はしてくださいませ。百倍を受けることになると言われる。そして、後の世においても、永遠のいのちを受け継ぐのです。

私たちは、この地上で信仰を持って生きていくことに、とても試されるのがバランスです。天の望みを持っていながらにして、しかし、地において任されていることを行っていきます。地において任されていることを行っていく中で、霊の戦いがあり、それでそのことが第一になってしまう誘惑があるのです。しかし、地に残されている間の働きをないがしろにして、天国だけを見ていればよいとするのも、間違っています。パウロは、板挟みにあると言いました。この地上を離れて、主と共に

いることのほうがはるかに優れているけれども、教会の人々のために残されていることが有益であることを、ピリピ 1 章で話しました。それはあたかも、天の召しという望みをしっかり抱きながら、地上における、主から任された働きをしっかりと行っていきます。

3C 肉の行いを殺す力

そして、天をしっかり見ていくことは、地上に属する肉の行いを殺す力が与えられます。コロサイ書 3 章です。「3:1-3 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。2 上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。」上にあるものを求めなさい、という勧めです。続けてパウロは、こう言っています。「5 ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」このように、地にあるからだの部分にある貪欲に打ち勝つように勧めているのです。私たちが、主が神の右の座におられることを見据えていえれば、この地上にあるものがいくら魅力あるものであっても、主のすばらしさがもっと魅力的であることを知っているはずで

同じような勧めを、ピリピ人にもパウロは書きました。そこには、自分の肉の欲望のままにしてよいとする偽りの教えを唱えている者たちがいました。しかし、パウロはこう言います。「3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」主が来られることが、このからだが卑しい体なのだということを教えてくれます。そして栄光のからだを主が用意しておられることを知ります。

主のおられるところ、いのちの木から実を取って食べる場所、パラダイスに向かっていることを決して忘れないでください。そこにおられる王なる神またキリストに召されて、冠を受け取ることを忘れないでください。そのために、私たちはここにいるのです。